

Essay

In My Life

「本来の日本語」と敬意

～「ネイティブ・ジャパニーズ」について～

シンキング・バース

日本語研究班

“Have a nice day.” と
ポーッと生きてんじゃねえーよ

最

近、「ネイティブ・イングリッシュ (Native English)」ということばを良く見かけます。杓子定規な教育英語ではない、主にアメリカ英語で使われている「日常英語」という意味なのでしょう。会話を中心にした英語表現で、その習得は、英語学習の大切な要素のひとつとされています。

翻って、ボクたちが日頃使っている日本語に、「ネイティブ・ジャパニーズ (Native Japanese)」の習得の推奨が当てはまるのかを考えてみます。

●日常語と形式的言語

日

本語の場合、「ネイティブ」と言うと、日本各地に残る「地域のことば (dialect)」や「若者ことば」のイメージになり、いわゆる「共通語 (Common language)」とは異なる用語や用法を持つことばです。「共通語」を形式的な日本語と定義すれば、「訛り語」や「俗語」と呼ばれる異端視された日本語という側面があります。「訛り語」や「俗語」に罪はないのですが、日本人同士で理解不能なことばもあるため、その習得の推奨には、やはり問題があるように思います。

「ネイティブ」の日本語訳は、「生来の／

土着の／本来の」などです。

「若者ことば」は、厳密に言えば「生来の」というより新語・造語の範疇に入るケースが多いのに対し、



「地域のことば」は、歴史的背景を背負っています。難しいことばで言えば、「共通語によって異化された日本語」で、日本人同士の意思疎通を円滑にするため、「生来の／土着の」を奪われた日本語と言えます。

「ネイティブ・イングリッシュ」の習得の推奨は、形式的で堅苦しい英語が日常生活では余り役に立たないという観点から、唱えられているように思えます。日本語でももちろん、形式的な日本語と日常的な日本語のちがいはあり、日常的な日本語の習得の推奨は、あつてしかるべきです。ところが、その日常的な日本語は、個人差が大きく、地域だけでなく、年齢や性別、職業や向き合う相手によって、大きく異なるのが現状と言えるでしょう。

●書いて覚える日本語

ボ

クたちは、近代日本語は日本人という意識の醸成に大きな役割を果たしたという立場で、日本語研究に取り組んでいます。いわゆる「共通語」は、功罪両面があるとはいえ、日本人にとっては必要不可欠な言語でした。その意味で「ネイティブ・ジャパニーズ」は、「共通語」に先んじて学ぶべき日本語にはなりにくいと言えます。

日本語の習得に欠かせない要素は、「書く」行為だとボクたちは考えています。日本語は、話しことばの音を書き写しただけの言語ではなく、漢字熟語を中心に、書写された語を読み書きする言語という特性があるからです。つまり、書いて覚える必要性が、より高い言語と言えます。

日本語を「書く」という行為は、ボクの年代の日本人にとっては、ごく一般的な行為でした。しかし、1990年代にワープロが普及し始めた頃から、日本語を「書く」行為は、キーボードを打つ行為に変わって行きました。新聞記者をしていたボクは、配布された初期ノートパソコンで日本語を打つ行為を、それほど抵抗なく受け入れました。ただ、感覚的な意識変化を、かなり自覚しました。

日常的に原稿用紙に向かって日本語を書いていたボクは、ある種の職業病なのか、指で日本語を考える感覚がありました。記事を頭で考えながら書くというより、すでに頭の中で出来上がった記事を、指が勝手に動いて日本語を組み立てて行く感覚でした。日本語を書くために「自動化された指」のような感覚だったかもしれません。

しかし、パソコンの導入によって、その感覚は失われました。入力ミスや漢字変換に気を配る必要があるため、「書く」ことでは起こり得ない事態への注意力が必要になりました。頭で日本語を考えざるを得なくなったのです。さらに、漢字の記述力は目に見えて落ちて行きました。「漢字を忘れる」と呼んだ現象です。ボクは時々、指で日本語を考える感覚を呼び戻すため、あえて下書き的にペンを持って日本語を書きます。それでもかつてのような感覚は、なかなか戻っては来ません。文字打ちと「書く」では、同じ日本語でも、何か微妙にちがう気がするのです。

●「ない」の多用は脱却が必要

ス

マホ時代の日本語は、SNSを中心としたステージでは、「話しことば」の書写が多くなりがちです。日常会話の文字化は、それ自体を問題視はできませんが、差別語を含む安直な「ネイティブ・ジャパニーズ」が、他者を傷つける要素を持つことは否定できません。

日本語の特性のひとつに、否定語「～ない」の多用があります。「いない」「行かない」などの単純否定に限らず、「いない？」「行かない？」など疑問形用法にも用います。また、「～しないと限らない」などの二重否定、「～と言っても過言ではない」などの強調用法もあります。「元気そーじゃない」と書くと、「元気に見える」または「元気に見えない」の両義的解釈が可能です。この「～ない」で相手を強く否定すると、「ボーッと生きてんじゃねえよ」になるのでしょうか。時と場合によっては、相手の心を傷つけてしまう「ネイティブ・ジャパニーズ」です。

ボクたちは、日常語としての日本語の洗練は必要と考えています。「～ない」の多用は、基本的には相手の言動などを否定的に捉えて自己保全を図る言語習慣から始まったのでしょうか。今風に言えば「リスペクト（敬意）」に欠ける言語習慣です。多くの「ネイティブ・ジャパニーズ」は、敬語表現が希薄で、相手をボロクソに言うことが親近感の表現のような、「リスペクト」の欠片もない会話が多々ありました。しかし、敬意を表す日本語は、ややこしい使い回しなど、問題が山積していることも確かです。

“Have a nice day.”。あるカフェで会計を済ませたボクに、店員が笑顔で掛けてくれた「ネイティブ・イングリッシュ」は、すばらしいと思います。

(2019年12月3日)

シンキング・バース新書

ボクとワタシの日本語診断
本来の日本語と敬意

2019年12月3日（初版）発行

著 者：シンキング・バース
日本語研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：**シンキング・バース**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バースに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。